

目取真俊「魂込め」における戦争記憶と〈現場〉

War Memories and the <On-Site-ness> in Shun Medoruma's "Mabuigumi"

黒沢 祐人

KUROSAWA MASATO

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies, master's student

著者抄録

本稿は、目取真俊の短編小説「魂込め」が、自律的自己に基づく人間中心的な共同性によっては把握困難な〈現場〉を表象することにより、戦争記憶を抱える戦後沖縄の人々の、人間以外の存在との空間的な共生や、身体の弱さとケアによる共同の生を描いていることを明らかにする。まず、浜辺で戦争記憶を想起する主人公ウタと、人物を取り巻く「環境的なもの」とが、境界性の曖昧な空間的関係を構成することで〈現場〉が成立していること、次に、ウタによる記憶の想起や解釈の行為遂行性が、人間以外の存在と居合わせることによって描かれていることが指摘され、人間以外の存在との共同の解釈が〈分有〉の経験による「共一解釈」として読み取られる。また、「環境的なもの」と身体の弱さとの関係を考察することで、〈現場〉の物語が身体の弱さを条件としていることが示され、最後に、規範的な言説空間では交錯することのない存在を巻き込むことで「魂込め」がケアの〈現場〉を語りだしていることが、食と記憶における「消化不良」の議論を通じて明らかにされる。

Summary

This paper aims to reveal the <on-site-ness> of war memories in Shun Medoruma's short story, "Mabuigumi." It claims that the story represents spatial communality between human and nonhuman, rather than the stereotypical model of anthropocentric communality based on autonomous subjectivity. It also discusses how the narrative holds care-related communality, which occurs between a vulnerable body and the care it needs.

In the 1st chapter, I discuss how the <on-site-ness> of this novel creates the spatial communality between the protagonist Uta, an Okinawan woman surviving the battle of Okinawa in 1945, and "the environmental things" surrounding Uta which makes their boundary become obscured when the war memories struck her on the beach. In the 2nd chapter, I consider the spatial performativity of Uta, who remembers and interprets nonhuman characters. In the 3rd chapter, I focus on the "co-interpretation," in which Uta and nonhuman simultaneously occur to the extent that they create ontological communality often referred as "co-participation." In the 4th chapter, I suggest the story of the <on-site-ness> needs a vulnerable body as its condition to be told. In the final chapter, I indicate that "Mabuigumi" represents the <on-site-ness> of war memories, as involving numerous beings, which would not intersect with each other under the normative system of discourse, through the discussion on two kinds of "indigestion" in this novel: food-related indigestion and traumatic-memory indigestion.

キーワード

沖縄文学 環境 戦争記憶 ケア

Keywords

Okinawan Literature; environment; war memory; care

原稿受理日: 2020.1.17.

Quadrante, No.22 (2020), pp.179-196.

目次

はじめに

1. 記憶の想起と「環境的なもの」
2. 人間以外の存在との〈現場〉における解釈
3. 〈共同性〉の露呈と「共一解釈」
4. 異物化する「環境的なもの」と身体の弱さ
5. アーマンによるケアと〈病い〉

6. 記憶と環境の消化不良

結論

はじめに

目取真俊の「魂込め」(1998)¹は、前年に発表され芥川賞を受賞した「水滴」(1997)と同様、沖縄戦の記憶をもつ戦争体験者を主

¹ 初出は『小説トリッパー』1998年夏季号、朝日新聞出版。本稿では、『目取真俊短篇小説選集2 赤い椰子の木』(2013)に収録のテキストを参照・引用した。なお、本文からの引用文の頁数は、引用文のあとに〔頁数〕と記載することとする。



人公とし、その記憶が戦後の生活にいかんして関わるのかを描く作品であるといえる。沖縄戦体験者の記憶が、国民国家の歴史叙述や沖縄共同体の集合的記憶によって抑圧されてきたとされる同時代状況において、これらの作品は、戦争非体験者や作品の読み手が、どのような形でその記憶の継承にかかわることが可能であるかを考えるための手がかりとして読まれてきた²。

「魂込め」に関する先行論の中でも特筆すべきは新城郁夫の論考であろう。多くの先行論と同様、この論考の中で新城は、浜辺で魂を落とし気を失ってしまった幸太郎の口内に潜むアーマン（巨大なヤドカリ）に対し戦争体験者の老婆ウタが提示する解釈に注目した。新城はこのウタの解釈を言語化以前の抑圧的段階まで詳細に分析することで、〈母を身籠る息子〉というジェンダー倒錯的な身体の見出し、この身体から規範的言説の支配に抗う沖縄戦の記憶の現在性を読み取った（新城 2010）。

さらに、この新城の論に対し、仲井眞健一は他者を解釈することの暴力性をより明確に主題化している。仲井眞は、特定の解釈を前提とする新城の読みの持つ危険性を指摘し、読み手である新城の解釈と作中人物であるウタの解釈を区別する必要性を示した。その上で、ウタの解釈行為において重要なのは、「共同体が事物や出来事を把握する際に要請する安定的な認識枠」が、解釈の失敗を通じてより他者に開かれたものへと変容していく点にあると述べている。仲井眞の論は、解釈への否定性を安易に解消してしまう「読むこと・解釈すること」の構造を問い直しているのである（仲

井眞 2017）。

以上のように、「魂込め」の先行論では、作中に描かれた記憶を、国民の歴史や沖縄共同体の集合的記憶といった既存の枠組みによっては理解できないものとして読む可能性が検討されてきている。また、「水滴」が特に記憶の「語り手」の問題を主題としていたのに対し、「魂込め」では「読み手／聴き手」の問題に主眼が当てられてきたとも言えるだろう。

しかしながら、既存の論考では、「表象・理解不可能な他者」の存在を受け入れることの重要性が言説中心的に論じられることによって、作品の様々な内容が捨象されてしまったように思われる。特に、これまで多くの先行論が理解や表象ができないという否定形の読みを通じて目取真作品を評価してきた一方で、そのような否定性を前提としたうえで露呈される〈共同性〉があることは十分に論じられてこなかったのではないだろうか³。

ここでいう〈共同性〉とは、屋嘉比収がすでに「集団自決」の問題において指摘していた、個と共同体が合一化して拡大した「自己（共同体）の声」に亀裂を入れる「他者の声」と、それを聞きとることで生き延びた人々との間に露呈された特異なコミュニケーションに関わるものである。屋嘉比は、同一性による共同体と個との合一化と日本軍の上意下達の構造的強制が、沖縄の民衆を「集団自決」へと導いたと分析し、一方でそのような合一化を切断する「他者の声」とそれを聞き取った者たちの存在が一定の人々を（強制的な）自死から救ったことを指摘している（屋嘉比 2009：36-54）。

しかし、自己や共同体の同一性を不可能に

² 沖縄における歴史叙述の問題については屋嘉比収の著作を参照されたい（屋嘉比 2009）。同著において屋嘉比は沖縄戦の非体験者がいかんして記憶を継承することが可能かという問題を議論しており、この問題意識は新城郁夫をはじめとする多くの沖縄文学研究者の前提となっている。

³ 例えば村上陽子は「記憶が不可避免にはらんでいる共有不可能性、表象不可能性を、『語られない』というかたちでくりかえし描きつづけているのが目取真俊という書き手である」として目取真作品の持つ否定性を評価している（村上 2015：261）。また、目取真作品についての複数の論考を収録する『越境広場』第四号の特集が「目取真俊 野生の文学、〈否〉の風水」と題されてもいるように、目取真作品の議論では、これまでテキストの否定性がことさら強調されてきた。また、「野生」という言葉が彼の作品の特徴として指摘されながらも、作品中の自然環境が装飾的なものや沖縄的なものの象徴などとしてしか理解されてこなかった点も問題であろう。

する経験において〈共同性〉を見出すなどということが果たして可能なのだろうか。おそらく、そのような経験を理解するには「自己」や、その集合である「共同体」の前提とする規範的な人間像——近代主義的な自律的人間像——そのものの問い直しが必要とされるだろう。この論考では、このような問題意識のもと、同一性原理によらない戦争記憶をめぐる人々の〈共同性〉を捉えるために、〈現場〉を読むという新たな読解方法を提示・実践することを試みたい。

この〈現場〉は、同一性原理に基づかない〈共同性〉の問題を、目取真の作品読解において議論する際に現われる独特な空間性である。目取真は、〈共同性〉を人間同士の問題としてのみならず、自然環境や動植物といった「環境的なもの」や「人間以外の存在」をも含めて、空間的に捉えようとしている。また、〈共同性〉に深くかかわるものとして「身体の弱さとケア」の実践を語る点にも特徴がある。本稿では、戦争記憶を想起する登場人物と人間以外の存在との連関や、物語の軸となっている身体の弱さとケア、さらに食と記憶の「消化不良」の問題に着目して議論を展開することによって、戦後沖縄を生きる人々の〈現場〉を、目取真がどのような物語として提示しているのかを明らかにしたい。

1. 記憶の想起と「環境的なもの」

ウタは浜に立ち、あたりを見まわした。浜潮木の葉がかすかに揺れ、あだんの茂みでアーマンの這う音がしている。木麻黄の防潮林が黒い壁になって海と集落を隔て、浜にいたのはウタ一人だった。急にいたたまれないほどの寂しさに襲われて

浜をおりと、ウタは足首を波に洗われながら歩いた。足もとに海蜚が光っては消える。波はあたたかくやわらかだった。ウタは立ち止まり、海に向かい、手を合わせた。しかし、祈りはどこにも届かなかった。
[292-3]

物語が幕を閉じるこの場面において、浜という空間をどのように読む必要があるだろうか。このような問いかけをしなければならないのは、「魂込め」における浜が、その中で登場人物が移動を繰り返す、単なる均質的で抽象的な舞台空間としては描かれていないように思われるからだ。

すなわち、「魂込め」における浜とは、木麻黄の防潮林にとりかこまれるところにある、あたたかい波のうねりとそこに生まれる音と光っては消える海蜚であり、潮をふくむ風の動きとにおいであり、足元の砂のやわらかさ、湿っぽさ、海亀の子の褐色の体を灼く乾いた砂の熱さ、その熱さとかかわりあう日差し、あるいは夜間、白い蕾のような月の放つ光の冷たさであり、その光を遮るものとしての浜潮木と、生い茂る葉の揺れるかすかな音、その木陰の静けさであり、そばに生えるあだんの茂みにわずかに聞こえる、アーマンをはじめとしたさまざまな生物の気配、それらが地を這うことに付随する忙しい音の動きである⁴。

このように、浜は、無数の「環境的なもの」に満ち溢れている。本稿が、「魂込め」という物語に読み取る〈共同性〉は、ひとまずこれらの存在と人物との空間的な共生のあり方である。これから分析するように、本稿において、この「環境的なもの」は、意識的な志向対象としては現れないまま人物を取り囲むように配座される空間表象を指す。「魂込め」という物

⁴ また、それは西暦1945年のある時期には、あだんの茂みにひそむ人間の低く屈んだ身体、緊張と恐怖に満ちた吐息とそれを押し殺す口元のゆがみでもあり、銃声の長い残響音と、使用済み弾頭の焦げたにおい、汗みずくで憔悴した兵士たちが踏みつける血や涙、体液、それらを吸う砂の重たさ、冷えた骸を照らす月と太陽、絶命した一人の女性の砂にまみれた頭髪をなびかせる風や、血に濁った海水のゆらぎ、友人の死を目前にした人間の悲鳴をかき消す波の音であっただろう。

語は、戦争記憶の想起を、浜に遍在する以上のような「環境的なもの」と人間が、その場に居合わせることで生じるものとして語っている。

以下では、そのような浜を構成する砂や波、あだんの茂みといった存在がテキストにおいてどのように描かれ、位置づけられているかを分析し、そのような空間性と沖縄戦の記憶とがいかなる連関にあるのかを考察していこう⁵。

「魂込め」における人間身体は、内と外を明確に境界づけるものとしては描かれていない。とはいえ、ここでは、規範的なものによって引かれた境界の攪乱可能性を指摘するような、従来の言説主義的な議論に立ち入ることはしない。ここで追求したいのは、そのような攪乱性が、その解体を試みるがゆえにむしろ前提とせざるをえない内と外の二元的関係そのものを避けた読解の可能性である⁶。

本作に描かれた「環境的なもの」は、人間個人の身体と明確には区別されないものとして描かれていることによって、互いに編み込まれたかたちで物語空間を構成していく。そして、この空間的な〈共同性〉において記憶は想起されるのである。例えば、あだんの茂みの存在は、ウタの身体と同じ場を共有することにおいて、その聴覚にすでに編み込まれている。このことは、ウタによって想起される戦時中の次の場面から読み取ることができるだろう。

二人はゆっくりと後ずさり、あだんの茂みに隠れた。崖に沿って歩いてくる三名の人影が見えた。低く身を屈め、銃を手にして崖の陰を移動していく男たちの息遣いや鉄兜の木の葉をこする音が、異様に大きく聞こえる。砂に顎を埋め、息をこらして数メートル先を歩いていく日本兵の姿を見つめた。〔280〕

身を隠すために潜り込んだあだんの茂みにおいて、周囲の音が異様なものとして自らの存在を主張し、物語に立ち現れる。それはまず危険の到来、すなわち日本兵の接近を隠れる者たちに伝えるものとして一応機能するだろう。しかし、あだんの茂みで体を隠すという行為は、そのようなある特定の目的のための手段として働くだけでなく、予期しない音との偶然の遭遇をも導いている。

ふいに背後で聞こえた砂音に、思わず声を上げそうになった。腹ばいになった太腿にオミトがしがみつく。草の葉に砂をばらまくような音はくり返し聞こえている。それが日本兵の足音ではないと知り、汗まみれの顔についた砂をそっと落とすと、ウタはオミトを促して体勢を変え浜の方を見た。

月明かりの下、砂を飛ばし、一頭の実亀が穴を掘っていた。沖には数百隻のア

⁵ 目取真の他の作品の先行論を見ると、例えば仲井眞による「風音」論では、戦争記憶をめぐる理解できないものの存在によって可能になる人間のネットワークの存在が示され、さらにその連関に人間以外の存在が密接にかかわる点をも指摘することで、作品の細部まで読み取る包括的な分析が達成されているといえる（仲井眞 2016）。本稿もこの論考と同様、環境的存在を含めたうえで記憶をめぐる人間たちの在り方を分析するが、仲井眞の論考のように人間以外の存在を、全く理解が出来ない絶対的他者として捉えるのでもなく、理解可能な客体として捉えることも避けたい。本稿の試みは、理解可能／不可能という観点では把握することの出来ない関係として人間と環境との連関を新たに捉え直すことである。

⁶ 本稿の読解は、ANT（Actor-network-theory）や「連関の社会学」と称される試みに類似しているといえる。その提唱者であるラトゥールは、規範的なものの構築性を指摘する脱構築的議論が、構築されていないものの存在を本質主義的に価値づけている点を批判したうえで、「それ自体が何ら『社会的』でない諸要素のあいだで新たな連関が（試行のもとで）生み出されているときに残る痕跡（trace）」を追うことを勧め、その際に、人間以外の存在を考慮することの重要性を指摘している（Latour 2005=2019: 26）。目取真俊の作品に対する先行論も脱構築的手法を用いた分析により、規範的なものの構築性を指摘し、そうした規範性を逸脱・拒絶するテキストの否定性（すなわち構築をまぬかれている何か）を評価するものが中心であった。例えば、新城による読解に見られるように、テキストに規範性の攪乱を読む試みは、その規範性を支配的で現実的なものとするがゆえに、規範性を逸脱する存在は、現実化されず、宙づりの状態にとどまるものとして確認することしかできないという限界を有しているように思われる（新城 2010）。

メリカの軍艦が浮かび、連日島に砲撃を加えていた。そういう海を泳ぎ、産卵のために島に上がってきたその海亀が、何かこの世のものではないような気がした。ウタは戦争が始まる前の村に戻ったような不思議な感覚で、砂に体を埋めた黒い塊を見つめ、浜ひるがおの葉に落ちる砂の音を聞いた。〔280〕

この場面における遭遇とは、「砂の音」との遭遇であり、その音と連関する「海亀」との、「月明かり」の下における遭遇である。のちにウタは、戦後の浜において海亀と再会することによって、それまで記憶の底に抑圧されていたオミトの存在と触れ合うが、オミトをめぐる記憶は、海亀の存在のみにかかわるのではない。それは、上記の場面が示すように、あだんの茂み、砂とその音（を発生させる浜ひるがおの葉）、月明かりに照らされた光景との空間的な連関において成立している。

これらの一連の遭遇は、ウタ自身が制御し、選択できるものではない。また、砂の音や月明かりとの遭遇は、あるアクターが別のアクターと出会うという、個別の要素同士の結合を意味するものでもない。「環境的なもの」と身体との関係には、自律的主体性を原理とする個別的な人間像によっては捉えることのできない〈共同性〉があるのだ。

そしてここに現れた「環境的なもの」と身体との連関は、戦時中に限らず、戦後のウタの生活にも一貫して見られるものでもある。次の場面からは、魂を落とした幸太郎に対するウタの魂込めの過程において、砂の感触と波の音、そして月の光の存在が、現在時の彼女の周囲に広がる空間として描かれていることが確認できる。

男たちが酒を飲んで騒いでいる公民館から出ると、フミを家に送り、ウタは一人で浜に戻った。白い蕾のような月の明かり

で、懐中電灯をつけなくても歩くのに不便はなかった。打ち寄せる波の音を聞きながらなめらかな砂の肌に足跡を刻み、ウタは浜潮木の所まで来た。青みを帯びた淡い影の下で、幸太郎の魂は海を見つめている。その横に腰をおろすと、ウタも月の光が揺らめく海に目をやった。〔272〕

ウタによる沖縄戦の記憶の直接的な想起は、先述したように海亀の登場によって触発されるのだが、その再会は、砂と波、月の光といった「環境的なもの」によって編み込まれた現在のウタの居場所と空間的に連関していることがこの描写から推測できる。これを踏まえると、例えば、呼びかけに答えてくれない幸太郎の魂のそばで「掌から砂をこぼしながら黙って座っていた」〔269〕という一見些細なウタのしぐさなども、砂の感触と零れ落ちる砂の音を確かめつつ、その後の戦争記憶の想起の瞬間を前意識的に手繰り寄せる行為として見逃すことはできないだろう。

「魂込め」の物語のいたるところで執拗に語られるこの「砂」の存在は他の「環境的なもの」と比べても際立った存在感を示しており、単純にこの語の使用回数を調べると、のべ31回にも及ぶことが分かる。とくに、海亀との再会直前の場面から、直後の戦時中の回想シーンを含めた浜を舞台とする場面〔278-84〕では21回も「砂」が現れている。さらに、物語の最後、ウタが海に向かって祈りをささげる場面〔291-2〕においても6回使用されており、テキストに出現する頻度は高い。浜を中心とするウタの戦争記憶は、その浜を構成する「環境的なもの」である砂の存在なしに成立しないことが、こうした点からも指摘可能だろう。砂は戦争記憶をめぐるこの物語を根幹から支えている「環境的なもの」なのである。

もちろん、それは、物語の主人公でも、登場人物でもない。擬人化されているわけではないため、セリフも与えられておらず、当然、

登場人物たちと言語的なコミュニケーションを取り交わすこともない。また、先行論でほとんど着目されてこなかったことからわかるように、解釈の対象として存在するものでもない。

しかし一方で、それは「魂込め」の物語を展開するためにとりあえず必要とされる便宜的な舞台空間でも、話の筋とは無関係な装飾物でもないのである。なぜなら、この作品における砂は、記憶と触れ合おうとする登場人物の皮膚や耳と連関して、すでに身体—環境に組み込まれており、物語の展開そのものに欠かせない存在として描かれているからだ。ウタが記憶に触れるという行為は、砂の感触なしに成立しない。その意味においてウタは砂と共に記憶に触れているといえるだろう。

いうまでもなく、ここでの「共に」は、共通の出自や目的のためにお互いが協力し合うという共同体の同一性原理とは異なる〈共同性〉を意味する。このような砂の性質を踏まえた上で、「魂込め」に描かれた「環境的なもの」を、物語の背景にも前景にも属せずに、それらの「あわい」において物語の空間性に関わっている存在である、とさしあたって表現することとしたい。

「環境的なもの」は、沖縄の環境特有のものでありながら、単なる沖縄的な表象として描かれているものではない。「魂込め」において、目取真は、この「環境的なもの」をあくまでも人々の戦後の生活のあわいに「ある」ものとして描出している。それゆえ、それらは単なる意味の連関ではなく、むしろ意味そのものを複数生み出しうる潜在性を有した空間の広がりとして読まれる必要があるのではないか。

これが目取真の小説における〈現場〉の語りの特徴的な手法である。目取真の語りは、記憶を想起する人間身体を、各々が自律的に存在しているのではなく、「環境的なもの」に空間的に依存した存在に他ならないことを明らかにするのである。

2. 人間以外の存在との〈現場〉における解釈

「魂込め」の物語においてウタは、幸太郎の魂、海亀、そしてアーマンといった人間以外の存在に対して何らかの解釈行為を行っている。「環境的なもの」との前意識的なあわいの関係とは異なり、以上の存在とのあいだには意識的な関係がある。一方で、これらの存在との間には、「個人」の間における意思疎通を図るような通常の言語的コミュニケーションが成立しない。このため、そこには独特の空間的な〈共同性〉が生じているように思われる。ここでは、幸太郎の魂と海亀に注目することでこの点について検討を加えたい。

例えば、次の場面では、ウタが幸太郎の魂の動きに注目して関係を取り合おうとしている。

浜のどこかから三線や掛け合いの歌声が聴こえてくるような気がして、ウタは胸の奥が痛んだ。夜、一人で浜に出てきたのは、いつ以来のことか思い出せなかった。清栄もオミトも勇吉も戦争で死んで、自分だけが歳をとり、こうして浜に座っていることが急に寂しくなって、ウタは幸太郎の魂に声をかけた。

「お前や何見よるか」

返事はなかった。月が雲に隠れ、光が弱まると幸太郎の姿も消えていくように思えた。

「帰らん、幸太郎」

ウタは立ち上がりながら言った。やわらかい風が吹いてくる海を見つめたまま幸太郎は、ほんの少し首をかしげたように見えた。葉影の揺らめきでそう見えたのかもしれないが、少しだけ自分の気持ちが通じたような気がして、ウタは手を合わせると浜を戻った。〔273〕

この場面で、ウタは、自らの声かけに対し魂が言葉で応じることがないため、相手の明確な意図が理解できない。一方で、不意に見せ

た首をかしげるといふ魂の仕草に何らかの交流が
かろうじて達成されたことを感じている。この
ようなウタと幸太郎の魂との関係には、解釈
が可能か不可能か、といった従来の論点によっ
ては捉えることのできない〈現場〉の空間的な
コミュニケーションの一端が垣間見えるように
思われる。

とはいえ、そのようなコミュニケーションが
解釈行為と全く関係がないわけではない。別
の場面では海亀と幸太郎の魂の交錯が空間的
にたどられることによって、ウタの解釈が新た
に生み出されている。

月の光は何十年も何百年も変わらない
と思う。砂を掘り、海に戻っていく海亀が、
戦争のさなかに見たのと同じ亀であり、同
時に、あのとき砂の中に残っていた卵が
孵化し、成長したもののようにも思える。
甲羅の砂を波が洗い落とす。滑るように
海に入った海亀は首を反らすと浜の方を
見た。幸太郎が海に向かってゆっくりと歩
きだす。

「行ってはならんど。幸太郎。行っては
ならんしが」

ウタは叫んだ。幸太郎は一瞬立ち止まっ
てウタを見た。しかし、すぐにまた、波間
に頭をもたげて漂っている海亀に目を移
し進み始める。ふと、その海亀がオミトの
生まれ変わりのような気がした。[283-4]

浜の方へ首を反らせて振り返る海亀と、海
亀の方を見つめ、海へと入っていく幸太郎の魂。
「海亀＝オミト」という解釈は、この両者の姿
勢の交錯を目撃することにおいて生じている。
この解釈行為において重要なのは、そこで生
じた解釈の内容が正しいか、誤っているかとい
う点ではなく、解釈するというウタの行為が、
ウタの周りに現れる海亀やアーマンといった人
間以外の存在と居合わせることによって生じて
いることではないだろうか。

ウタの解釈は〈現場〉で居合わせた人間以
外の存在なしには成立しない。その解釈は、
常にすでに共同的に生み出されているものな
のである。目取真は、「魂込め」において、記
憶をめぐる解釈行為の際に露呈する、こうした
人間以外の存在との空間的な共同性を〈現場〉
として描いているように思われる。

人間以外の存在と共に解釈することの在り
方を以上のように考えると、従来の研究におい
て、しばしば村落共同体における伝統的物語
を象徴する存在としてとらえられてきた「海亀」
の作品上の位置づけも再考する必要があること
がわかるだろう。なぜなら、海亀は〈現場〉
でのウタとの身体的空間的交流において、そ
の都度新たに意味づけをされ、様々な記憶と
結びつく潜在性を有する存在として描かれてい
るからである。

伝統的物語との連関は、海亀とウタの関係
によって生じる可能性の一つに過ぎない。そ
のような伝統性とは関係のないオミトをめぐる
戦争記憶の到来が、この海亀と〈現場〉に居
合わせることによりはじめて可能となったという
点からも、海亀を伝統的なものと短絡すること
によって、固定的な伝統的世界像に埋め込ん
でしまう読みの不十分さが指摘できるだろう。

そしてそのような戦争記憶の回帰のみなら
ず、戦時中には戦前の村落を想起させるもの
として〔280〕、また、浜での子亀たちとの戦
後における邂逅では、次のようなウタ自身の原
初的な触れ合いの記憶の想起をも可能にして
いた。

汗疹ができた幼いウタを母親が海で水
浴びさせ、父親が裸のウタを抱き上げて
笑う。ふくらみはじめた胸が恥ずかしくて
両腕で隠すと、木麻黄の下に立っていた
清栄が走ってきて腕をどけ唇をつける。
乳首をくすぐる舌の感触に笑い声を上げ
て身をよじり、浜を走った。浜の中央まで
来ると、月明かりの下でオミトや勇吉や村

の若い衆が車座になって歌い舞う姿が見え、波と風の音の間に三線の音がかすかに聞こえる。〔291〕

この回想においても、やはり浜という〈現場〉における人間と人間以外の存在との身体的交流が描かれている。それは足元の砂の感触や波と風、三線の音色に月明かりの下で取りまかれているというこの作品特有の空間性、すなわち前景化も背景化もされないあわいにある「環境的なもの」との交流を可能にする〈現場〉として、「魂込め」に繰り返し描かれる根本的なモチーフなのである。

3.〈共同性〉の露呈と「共一解釈」

幸太郎の魂や海亀との関係以上に、アーマンとウタとのあいだに生まれる解釈行為を通じた関係性を描く場面は、この作品において際立って印象的な場面であるといえよう。そのため、先行論においてもこの場面をめぐる様々な「解釈」が提示されてきた。ここでは、両者の関係に、〈現場〉の解釈行為を通じた〈共同性〉の露呈を読みなおすことを試みたい。

「魂込め」の中心的存在であるアーマンをめぐるのは、批評家、研究者らによって様々な解釈がすでに施されている。幸太郎の口内に侵入するアーマンを、沖縄内部に侵略する外部の存在として理解し、米軍基地や日本軍の象徴とする大澤真幸の解釈や、アーマンがそもそも土着の生物であることからそうした解釈を批判し、そこに、乳飲み子の頃に親を失った幸太郎にトラウマ的に到来する言語化できない親の記憶の存在を読み取るスーザン・ブーテレイの解釈、また、アーマンをめぐるグロテスクな物語が伝統的な表象体系や制度化された沖縄戦の語りに取り込むことのできない裂け目として描かれていることを指摘し、その結果として否定的に示される「語られぬもの」の存在の重要性を指摘する鈴木智之の論考もある。先述したように、新城は、作中に示され

た「アーマン＝オミト」という解釈を端緒として、制度化された規範的言説空間に取り込まれない身体の豊饒さをジェンダー／セクシュアリティの観点から論じ、仲井眞は読み手とウタの解釈行為を区別する必要性を指摘したうえで、アーマンの解釈が不可能であるという否定性を受け入れることによって、それまでの一貫した世界観が失われ、ウタがはじめてオミトの存在と向き合うことが可能になったと論じる(大澤 2002; ブーテレイ 2011; 鈴木 2013; 新城 2010; 仲井眞 2017)。

しかしながら、こうした読解は、いずれもアーマンを讀みの対象として客体化し、それを何らかのコンテクストに配置する(あるいは、解釈困難な「裂け目」として配置する)ことで自らの解釈(あるいは、解釈不可能性)を提示するという方法をとっているために、物語空間に「ある」存在としてアーマンを扱う可能性が見失われてしまっているのではないか。前章で読み直した海亀同様、アーマンとは、何らかの象徴や寓意的記号、あるいはいかなる意味の確定をも拒絶する表象・理解不可能な対象などである以前に、登場人物たちとともに〈現場〉という空間性を生み出していく具体的存在にほかならないのである。

この視点を取り入れることによって、「アーマン＝オミト」というウタの解釈を支えるものとして、アーマンそのものの存在が現れてくる。しばしば引用される次の場面において注目すべきは、そのアーマンの身体的振る舞いである。

大きなハムくらいもあるやわらかな腹部に、鋏の刃が打ちおろされた。ブシュッという鈍い音とともに、生臭い液が飛び散る。腹部を両断されたアーマンは、それでもスコップの刃を離さない。そのはさみの根元にさらに鋏の刃が打ち込まれた。はさみが折れ、金城が引っくり返る。アーマンは脂光りするしなびた腹を引きずりながら残った足で壁まで這い、体を返してウ

タを見た。弱々しい目の光にふいに哀れみが湧いた。

「待ていよ、弘」

そう叫んだが、振りおろしたスコップは止められなかった。背中の中羅が砕け、濃い緑色の液が流れ出す。それでもまだアーマンは死ななかった。二つの目が自分を見つめている。そう思ったとき、突然浮かんだ考えにウタは胸を衝かれた。

このアーマンこそがオミトの生まれ変わりではなかったか……。興奮した金城がスコップを振りおろし、とどめをさした。
〔289〕

アーマン退治のこの場面において、ウタは幸太郎の敵討ちというばかりに激しい敵意を示してその破壊を試みる。しかしながら、「体を返してウタを見」るアーマンの「弱々しい目の光」に触れると突然のためらいが生まれる。そして「二つの目が自分を見つめている」と感じたその瞬間、「アーマンこそがオミトの生まれ変わりではなかったか」という解釈に至るのであった。

例えば仲井眞は、この瞬間におけるアーマンの視線の照り返しを、相手を客体化する視線を無効にする否定性として読んでいる（仲井眞 2017: 60-1）。しかしながら、ここではこの視線のやりとりによってむしろ「アーマン＝オミト」という解釈が生じているのであるから、そのようにアーマンの視線を解釈の拒絶として理解することの妥当性には疑問が残る。とはいえ、「海亀＝オミト」という伝統的物語を利用したウタ自身の解釈に矛盾をきたすことから、この視線の交錯と解釈がメタ的な立場からアーマンを客体化し、ウタの世界観にとって都合のよい意味を与えるようなモメントであるともいえないことは確かである。

単なる解釈の拒絶でも、一方的な解釈でもないこの瞬間における経験を理解するには、おそらく〈分有〉という経験について今一度確

認する必要がある。例えば、ジャン＝リュック・ナンシーが「共一出現」という概念を用いて説明する〈分有〉の在り方は、ここでのウタとアーマンとのあいだに生じた経験と密接に関係しているように思われる。ナンシーはこの「共一出現」を、個別の主体間に実在すると仮定される「絆」のような共同性と区別して次のように説明している。

共一出現の次元は絆の次元よりもさらに根源的である。それは、すでに与えられた諸主体（諸客体）の間に設定されるものでもなければ確立されるものでもなく、そこに浮上してくるものでもない。それは間そのものの出現なのである。つまり、君と私（われわれの間で）は、とが並置の価値をもつのではなく、露呈の価値をもっている定式である。共一出現のうちに露呈されているのは、可能なあらゆる結合にしたがって、「君（と）（は）（まったく別の）私」ということを、あるいはもっと簡単に、君が分有する私を読み取らねばならない、ということである。（Nancy 1986=2001: 53-4）

ウタとアーマンとは、先に引用した場面において、「共一出現」している。外敵であったはずのアーマンが、幸太郎の母オミトではないかと感じるという、それまでのウタの理解を超える解釈が生じるこの場面では、自分自身の自律的な行為として解釈を完結することができない。なぜなら、その（ウタにとって）不可能な解釈は、アーマンの存在なしには到来しなかったものであるからだ。

目取真が「魂込め」で描くのは、こうした〈共同性〉である。それは、個別の存在同士が、各々の間に「絆」とでも呼ぶべき倫理的関係を構築するという「個人」や「間主観性」をモデルとした共同性とは根本的に異なる。本作において〈共同性〉は、出来事を通じた〈共に

在る〉ことの露呈として語られているのである。それが「並置」としての二者関係でなく、あくまでも「露呈」であるというのは、「わたし—あなた」という二者関係が、〈共同性〉の生起と同じ瞬間に初めて成立するからだ。

このことを踏まえると、伝統的な物語の世界観を持つウタによって理解困難な「アーマン＝オミト」という解釈は、そもそもウタの解釈ではなかったと言えるだろう。また、それはアーマンの解釈でもないし、ウタとアーマンが協力した結果としての解釈であると言えないのだ。その解釈は、あくまでも解釈行為の瞬間において生み出された、いわば〈アーマン—ウタ〉という共同存在によって可能になったものである。すなわち、その解釈は、ウタとアーマンの〈共同性〉そのものによって露呈した「共—解釈」なのである⁷。

4. 異物化する「環境的なもの」と身体の弱さ

しかし、なぜウタとアーマンの解釈行為の場面において、このような特別な経験が生じているのだろうか。注目すべき点は、先ほどの場面において、ウタがアーマンの「弱々しい目の光」に気づくことで「ふいに哀れみが湧いた」と語られている点であろう。このときウタはアーマンの身体が表出する「弱さ」をたしかに感受しているのだ。解釈を促しながらも、なおその解釈の固定化を困難にするアーマンの否定性は、解釈可能／不可能という従来の論点に還元されない、他者の弱さとそれに差し伸べられるケアの営みを踏まえることでより適切に理解できるのではないだろうか。目取真の語る〈共同性〉はしばしば「依存とケア」の関係

にかかわるのである。

「環境的なもの」や人間以外の存在と同じ場に居合わせることによって、戦争記憶をめぐる想起や解釈が可能になった一方で、例えばアーマンと幸太郎の関係に見られるように、通常あわいにある「環境的なもの」が異物として前景化されることを通じて、登場人物たちは他者の弱さや自分自身の弱さと出会うこととなる。このようなとき、目取真作品においてしばしば描かれるのが「依存とケア」の関係である。弱さを抱えるものの生は他者のケアに依存し、ケアを必要とするものの呼びかけに応じて人はケアするものとなる。ここでは、「環境的なもの」による空間性が、弱さを抱える人間の生にとっていかなる意味を持つのかという問題について考えておきたい。

例えば、目取真の代表作ともいえる「水滴」という作品においても、異物化する「環境的なもの」とケア行為との関係は物語において重要なものであった。沖縄戦体験者であり、戦後は戦争体験の語り部をする主人公徳正は、足先が「冬瓜」という植物のように膨れ上がり、意識はあるが寝たきりになってしまうという不思議な体験をする。徳正の身体はこうして、妻であるウシや周りの人々からのケアに依存する存在となったのだ⁸。

一方、「魂込め」では、本来あだんの茂みなどに潜んでいる「環境的なもの」であるはずのアーマンが、魂を落として意識を失った幸太郎の口内に異物として現れる。弱さを抱えた身体の登場によって、ウタを中心とした村民たちの多くがケアするものとして次々と呼び出されていく。目取真作品に描かれる異物化した

⁷ 例えば、本論と同じく屋嘉比の議論を参照している新城郁夫の「魂込め」論においても、このアーマン＝オミトという解釈は、伝統的共同体や国民国家の物語の根幹に据えられているジェンダー規範性によってそれまで排除されてきた存在たちとの共生の可能性を示すものとして理解されている（新城 2010）。しかし、ウタの解釈が持つ規範的なものへの攪乱性が詳細に分析される一方で、ウタとアーマンの〈共同性〉については分析されなかった。また、新城の論において「共生」は、あくまでも未来への祈りとしてその可能性を繰り延ばされる、現在時においては不可能なものとして理解されており、ケアや食といった作品がすでに語っているはずの共生の可能性については述べられていない。

⁸ 「依存とケア」という観点から「水滴」を読み直す試みについては、拙論「依存とケアの水 目取真俊「水滴」における記憶の現在性の再考」を参照されたい。この論考では、依存とケアの関係を分析することを通じて、従来の論考では記憶の分有から疎外されていると読まれてきた女性登場人物たちを、そのような分有の経験において重要な役割を果たしている存在として読み直し、作品に描かれた戦争記憶の現在性について再考を加えている（黒沢 2019）。

「環境的なもの」と人間とのかかわりにおいて、しばしば身体の弱さとケアの関係性が語られていることには注目すべきであろう。

しかしながら、妻のケアにより寝たきりの徳正が目覚めるという結末において、一応成功したかのように見える「水滴」におけるケア行為に対し、「魂込め」では幸太郎の死というかたちで明白なケアの失敗が語られている。この差異をどのように理解すればよいだろうか。

「水滴」に描かれるケア行為と「魂込め」のケア行為との間の差異としてここで挙げておく必要があるのは、「魂込め」における、ケアする対象との触れ合いの希薄さであろう。例えば「手当てをする」という言葉が示すように、現実のケア行為とはしばしば身体の接触を伴うものとしてある。「水滴」では徳正の身体を、その妻であるウシや、いとこの清裕が丁寧に介抱しており、徳正と戦死した石嶺の亡霊との関係において過剰といえるほどに強調されるのもまた身体的な接触であった。一方で、以下の場面から読み取ることができるように、「魂込め」におけるウタのケア行為は、幸太郎の「魂」という、触れることが著しく困難な対象をめぐる営みとして語られている。

祈りが終わると、ウタはTシャツを幸太郎の肩にかけて立ち上がらせようとした。しかし、水に触れるような感触が指先にかすかにあっただけで、幸太郎の魂は座ったままだった。今まで何百回も魂込めをしてきたが、ほとんどの魂は素直に言うことを聞いてくれた。海をみつめたまま動こうとしない幸太郎の魂にウタはとまどった。
〔265-6〕

幸太郎の魂に唯一触れることができたこの一瞬も、かすかな水の感触程度しか得られない。このような経験は、「水滴」における徳正と石嶺との濃密な身体的な触れ合いには及ばないだろう。これは魂込めというケア行為が、

あくまで「祈り」として実践されることが生む困難さであるかもしれない。

しかしながら、ウタによるケア行為について、それが単に祈りであるために失敗したと理解するだけでは、〈現場〉を描くこの作品の読みとしては不十分であるように思われる。なぜなら、その祈りは、決してウタの単独の行為としては語られておらず、むしろその行為自体がある種の〈共同性〉の発露のように思われるからだ。本作の最後の場面をもう一度確認したい。

ウタは浜に立ち、あたりを見まわした。浜潮木の葉がかすかに揺れ、あだんの茂みでアーマンの這う音がしている。木麻黄の防潮林が黒い壁になって海と集落を隔て、浜にいるのはウタ一人だった。急にいたたまれないほどの寂しさに襲われて浜をおりと、ウタは足首を波に洗われながら歩いた。足もとに海蛭が光っては消える。波はあたたかくやわらかだった。ウタは立ち止まり、海に向かい、手を合わせた。しかし、祈りはどこにも届かなかった。
〔292-3〕

「魂込め」が、「環境的なもの」と人間とが生み出す空間性によって語られていることはすでに述べてきた。砂や波との触れ合いが印象的に描かれているこの場面からは、幸太郎の死後、その死を抱えるウタが、そうした「環境的なもの」とともにこれからも生きていくことが予感されるのではないか。ウタは浜に立っている。物語の最後の場面はそのような〈現場〉に存在する希望——弱さを抱える人々がその弱さと向き合いながら生きることのできる空間——を描いたものとして読まれる必要があるはずだ。

また、さらにここで思い出しておきたいのは、そもそも魂込めという伝統的な儀礼行為こそ、当事者が魂を落とした現場で行われ、その場に転がる石を拾うといった空間的な行為を伴

うものであったという事実である。魂込めという儀式のこうした特徴は、本論がこれまで読み取ってきたこの作品の〈現場〉という主題と共鳴するといえよう。

「魂込め」と題されたこの作品における目取真の試みは、人間以外の存在をも含んだうえで〈現場〉の空間的な〈共同性〉を捉えることによって、伝統的儀式である魂込めの現在の意味を、単なる伝統性に短絡せずに新たに語りなおす試みであったのではないか。伝統的儀式である魂込めは〈現場〉の実践において必ずしも伝統的なものとのみ連関するのではない。その実践はすでに見てきたように、既成のコンテクストに回収することのできない様々な環境・人間・記憶の連関を生むことによって、新たな物語を語り出していたのである⁹。

5. アーマンによるケアと〈病い〉

前章で指摘したように、目取真は「触れ合うこと」をケア行為において重要なモメントとして作中で語っているように思われる。このことをふまえると、アーマンと幸太郎の関係性における過剰なまでの身体接触を、ケアに結びつけて解釈する可能性が浮かび上がるのではないだろうか。ウタが幸太郎の魂に向き合うさなか、幸太郎の身体をケアしていたのは、実のところアーマンなのではないだろうか。

アーマンが幸太郎の身体をケアしているとするこの解釈の妥当性は、テキストに描かれた、いくつかの点において示されうる。例えば、幸太郎の口にアーマンが無理やり潜り込んだために幸太郎が魂を落としたのではなく、すでに魂を落とし心身喪失していた幸太郎の口内を住処にしたのだとすれば、アーマンは幸太郎の身体を暴力的に占拠しているというよりも、むしろ魂が不在の身体を守るために幸太郎の

口内に一時的に潜んでいるようにも見える。また、アーマンが口内に潜むことで周囲の村民によるケアを呼び寄せたがゆえに、幸太郎の魂の方は、身体の維持や瑣末な日常生活に煩わされず、自由に魂の赴くまま浜に佇んでいることができていたともいえる。さらに、幸太郎の死は、確かにアーマンを喉に詰まらせたことが原因であるが、そもそもそれは本土のジャーナリストがフラッシュを当てなければ生じなかった事故であり、アーマンが幸太郎に危害を与えようとしたことによるものではないはずだ。

このような点をふまえると、やはりアーマンは幸太郎の身体にとっての脅威であるというよりも、弱さを抱える身体に寄り添うことによって幸太郎をケアする存在であると解釈する必要があるように思われる。「魂込め」において、「環境的なもの」はたしかにときに異物化して人間身体の弱さを露呈させるのだが、異物化した存在は決してその身体を一方的に破壊するものとして描かれるのではない。魂を落とした幸太郎が、それまでの日常的な生活を送ることが不可能となったように、それはそれまでの生活の反復をたしかに困難にする。しかしそれと同時に、身体の弱さとケアの経験を土台とする新たな生の可能性も示しているのである。

とはいえ、幸太郎は命を落とす。このことを見逃さないまま、なおこの作品によって語られる様々な社会・環境の連関を捉えるために、ここでは人間の病いを個人のものではなく、共同的なものとして読む可能性を示しておきたい。「魂込め」の語る病いは、ケアを必要とする幸太郎と、ケアを試みるウタやそのほかの村民たち、さらに「環境的なもの」や人間以外の存在と、浜において居合わせることを通じて立ち現れた出来事の総体を意味しているのである。

⁹ それゆえ、本作における魂込めという行為は、例えば新城が指摘するように、戦争記憶の回帰を抑圧してしまう、「共同的規範の維持という使命において遂行される規律化」（新城 2010: 170）のための行為として読むのではなく、「環境的なもの」との関係性に編み込まれながら、戦争の記憶と向き合い生活する戦後沖縄の人々の〈現場〉を照射するためのモチーフとして読むことが必要とされる。

現象学的なアプローチを応用するケア論者である西村ユミが説明するように、病気という現象は、病んでいる個人の経験として限定されるものではなく、まずもって複数の具体的な他者たちのあいだで形成されるものである。そのような他者との交流において「〈病い〉はネガティブな経験としてのみ固定されず、ときに苦しみを実感させ、ときに日々の暮らしのなかに浸透し、またときに、他者とのつながりの経験として顕在化する」ものとしてある。また、〈病い〉は「ともにある」という現実の関係において「交流する身体」の間に生じるものであると述べられている（西村 2007: 233-42）¹⁰。

「魂込め」は、戦後沖縄における「魂落とし」を、この出来事としての〈病い〉として語ろうとするものなのである。「魂込め」において幸太郎をめぐる〈病い〉は、幸太郎の単独的な経験として描かれているのではない。なぜなら、それは、村民たちのケアを促すなかで、ウタの戦争記憶の想起を導き、そのことを通じて忘却・抑圧していた記憶を、自らの現在の苦しみとしてウタに実感させるものでもあったからである。

そしてそのような〈病い〉という共同の経験を通じて、現在の生を国家的・伝統的語りによって固定的に意味づけせずに、新たな他者との出会いの可能性へ向けて未来を開くという、新城や仲井眞らによる先行論で指摘されてきたような倫理的な生がはじめて可能となったのであった。ウタは、魂込めを通じて、アーマンや海亀、そして「浜に横たわるオミト」〔291〕と出会い直し、浜という〈現場〉において「他者ととともにあること」に気づかされたのである¹¹。

このように「魂込め」を〈病い〉を描く物語として読むと、祈りを届ける力を失い、浜辺

に立ち尽くすウタの弱さも、その弱さに差し伸べられるさらなるケアの到来を潜在していると考えることができるはずだ。「祈りはどこにも届かなかった」というこの物語の最後の言葉は、先行論が総じて指摘するようなテキストの否定性を示すものである以上に、ウタの弱さを示すものとしてまず感受される必要があるのではないだろうか。

目取真は、戦後沖縄に生きることを、何らかの弱さを生の条件とすることであると捉えているように思われる。そして、彼はその弱さを単なる否定的なものとして捉えない。その弱さは新たな〈共同性〉の条件でもあるからだ。「魂込め」が語るのは、戦後沖縄を生きる人々の弱さを条件とする〈共同性〉の物語なのである。

6. 記憶と環境の消化不良

本稿で最後に確認したいのは、そのようなウタの弱さが「食」の困難を伴って描かれている点である。魂込めがうまくいかず、それが「三日、四日と重なるうちに、焦りが募ってきて、ウタは無力感と苛立ちで食事もうるくにとれなくなった」〔273〕とあるように、物語のなかでウタは常に食欲不振に陥っている。また、熱い茶を飲むことからウタの朝がはじまるという冒頭の説明や、幸太郎の魂落としの件で村民が集まるたびにそこで食事がとられる場面が描かれるなど、「魂込め」では、物語の端々で「食」の営みが垣間見られる。そもそも戦時中にオミトが殺された原因も、洞窟で生活する飢えた人々に与える食料を手に入れようとしたことにあった。そして、アーマンを口にふくんだまま、それを消化できない幸太郎による「食の失敗」こそが物語の発端でもあるといっていよい。

特にこの「食の失敗」のモチーフは、トラウマ記憶の議論においてすでに検討されてきて

¹⁰ 「魂込め」の先行論として「病」に注目した論がすでに小嶋洋輔によって提出されているが、小嶋の論は病というものが必然的に伴うはずのケアのモメントに言及してはいないため、作品の描く病の全体像を把握する試みとはなっていない（小嶋 2009）。

¹¹ 西村が述べるように、「私たちは、ひとびととともにある。他者の傍らに存在する者として存在している。他者との関係のなかで、その結び目としての経験を担いつつ、『他者ととともにある』としてあることに気づかされる」（西村 2007: 240）。

いる重要なモチーフでもある。例えば新城郁夫は、このような記憶をめぐる、岡本恵徳の思想的営為を再考している。その中で新城は次のように述べている。

生者は死者の身体の痕跡を呑み込むという形で他者が生きた時間に係留され、そして他者に孕まれていたかもしれぬ記憶に連結されているのであり、このとき、死者は、岡本の言葉を借用するならば「意味の分からぬままに肉体化」され、残存し、肉体と肉体の間で乗り継がれることを通して、今を生きる者を「規制」するものとなる。(新城 2018: 90)

このような存在が、「呑み込んだモノを消化できずにいる存在者」(新城 2018: 90)とさらに表現されているように、ここでは、身体にとって記憶が「消化不良」の異物となり、現在を生きる人間の生に対して「規制」を与える可能性が捉えられようとしている。この時、「規制」という言葉は、主体の自律性を阻害するものとして否定的に使われているのではない。ここまでの本稿の議論と重ね合わせれば、それは、むしろ様々な他者と共に〈現場〉を生きる人間の身体—記憶に露呈される〈共同性〉を示すものであると理解する必要があるだろう。

また、「魂込め」の物語が語るのは、人間身体というものが、決して自律的に存在しえず、常にすでに「環境的なもの」や人間以外の存在との〈共同性〉を生きていることであった。

つまり、「規制」がかかわるのは、決して「人間」だけではないのである。消化不良の記憶は、物語の生み出す空間そのものに痕跡として残り、その痕跡が新たな〈現場〉を構成していくのだ。

本稿が、単に作品に語られた人間同士の〈共同性〉を読むのではなく、あくまでも〈現場〉を読むという試みを実践したのは、以上のような「環境的なもの」や人間以外の存在との空間的関係性を考慮した上で、記憶の分有の問題を議論する必要があると考えたためである。カイル・イケダも指摘しているように、戦後沖縄における戦争記憶の分有を考える場合、戦争体験者と戦後世代の人々が地理的に類似した環境に生きていることに注目する必要がある。「魂込め」においても、戦時中と状況は変わりながらも、ウタやその他の人物たちは、戦場であった浜と同じ浜に生きているのである(Ikeda 2012)¹²。

このことを踏まえると、オミトや清栄たちの戦中における死が、戦場での死体の喪失として語られていることも作品の重要な点として読み直すことができる。すなわち、死体は適切な手順で葬送されることなく、そのために腐敗し、分解され、浜のどこかに完全に砂塵と化して消えてしまわずに、今も骨となり取り残されている可能性があるのだ。

あるいは、彼らの死肉は浜に存在する雑食の生物である無数のヤドカリたちによって喰われたのかもしれない¹³。とくにヤシガニのような巨大なヤドカリは自らの生を維持するために、あだんの木の実や、海亀の卵、孵化したば

¹² 目取真俊のような戦争体験者の子世代は、戦争トラウマを抱える親や親戚と身近に接することによって二次的なトラウマ経験を受ける世代であるとされている。この点から目取真俊の創作活動について議論するイケダは、多くが故郷を離れて暮らすホロコースト体験者たちの子世代と異なり、沖縄戦体験者たちの子世代が戦場であった沖縄の土地に暮らしていることに注目し、戦争体験者と戦後世代の間におけるそのような地理的な状況の共有が持つ意味を目取真俊の創作を通じて考察している。

¹³ 目取真俊は、初期の作品「風音」において、より直接的に人間(特攻隊員)の死体がカニやヤドカリなどの生物に喰われる場面を描いている。これについて彼は「……[特攻隊員の]遺体はカニやヤドカリに食い尽くされます。『海ゆかば水漬く屍』になるということは、そうやって肉体が損傷し、膨張し、腐乱して、サメや魚やカニ、ヤドカリに食べられるということなのです。漂着した遺体の無残さを見れば、特攻を美化するイメージ操作が不可能になると思います」と説明し、戦場における現場の死に様を描くことがもつ、特攻隊の死のイメージの美化への対抗可能性を指摘している(目取真俊 2005: 81)。既存の支配的な表象に対する目取真作品の批判性は、殉国美談のようなステレオタイプの戦争表象には存在する余地のない「人間以外の存在」をも小説の対象として捉えようとする目取真特有の視点によって生み出されている。

かりの子亀を食べ、ときに浜に横たわる様々な生物の死体をあさることもあるという（藤田 2010）¹⁴。オミトと清栄の身体は、死後、無数のヤドカリの胃袋に収められ、喰ったヤドカリは二人を自らの栄養とし、生殖を繰り返す。そして、おそらくはその生殖の連鎖のどこかに現れた一匹のアーマンが、偶然幸太郎の口内に潜り込んでしまうのだ。そこに弱さを抱えた身体が現れ、ウタによるケア行為として魂込めが要請されたのだろう。

このような解釈は、「読み手」がメタ的な立場から行なった場合、戦死者たちを環境循環の普遍的物語へと安易に回収することで、その死の意味を問うことを避ける振る舞いであると批判されるべきであろう。しかしながら、ウタが海亀やアーマンをオミトの「生まれ変わり」とであると解釈したように、その生活は、あくまでもそのような循環的な世界像に根差して繰り延べられているという事実を否定することはできないのではないか。

つまり、それが倫理的に正しいか否かという問題とは別に、そのような生活を送らざるを得ないという有限性がすでに存在するのである。読み手がウタの「弱さ」と向き合うためにも、こうした物事のうまくいかなさを前提としたうえで作品を読み直すことが必要とされるのではないか。「魂込め」は、言説規範の攪乱というラディカルな生の可能性を示す一方で、登場人物たちの生活の有限性も捉えようとしている。身体の弱さやケア、食といった主題は、脱構築的な生が、あくまでも日常生活を土台として可能となることを描くために必要とされたものだったのである。

一方で、この魂込めという実践を通じて、消化不良のまま忘却されていたオミトや清栄たち

の記憶が再び想起され、再記憶化されたのも確かである。仲井眞も指摘するように、このことによって、ウタの世界観を支える物語自体が、既存の物語を組み直すという形で新たに再構成されようとしていることも確かであろう（仲井眞 2017: 60）。次の一節は、浜という〈現場〉における、伝統的物語のそのような組み直しの徴候として読み取ることができるはずだ。

海のそばの集落に生まれ、海に湧く生き物を食べて育ち、人間は海によって生かされ、死ねば海のかなたの世界に行くのだと教えられてきた。浜に横たわるオミトの黒い影が目に見えた。〔291〕

海のそばに生きるものは、そこに生きるものたちを食べ、いずれは死に、海の彼方の世界へと運ばれる。しかし、あるものは食べられたあと、消え去らない骨を浜に埋め、あるいは消化されることを拒絶する記憶として他者に生きることによって浜に残る。そしてその消化不良の記憶を生きる弱い身体が、まさにその記憶一身体の弱さを通じて浜に生きる無数の存在との空間的な〈共同性〉を広げていく。そのようにして人間と自然、死者と生者といった、規範化された言説空間においては本来交わり合うはずのない多様な存在を巻き込んだ物語を生み出す力を持つものが、「魂込め」の語り出す〈現場〉であったのだといえよう。

しかし一方で、そのような沖縄の〈現場〉が、この村落周辺を標的とした「ヤマトウの企業が計画しているホテルの建設」〔270〕のような観光開発による土地の改変を被るとすれば、いかなる影響が生じるのだろうか¹⁵。

¹⁴ 沖縄では、大型のヤドカリは食用とされることもあるが、一方でそれが「墓地」に頻繁に現れることから食べることを避ける場合があるともいうように、その存在は生物学的にも文化的にも死者と食と密接にかかわっている。このようなヤドカリの在り方をとってみても、目取眞作品におけるアーマンのようないわゆる沖縄的なものを、単なる表象や象徴として扱うことはできないということが分かる。それは沖縄の物質的な現実である。なお尾西康充が「魂込め」を論じる中ですでに指摘しているように、「オオヤドカリ葬」と呼ばれる沖縄の伝統的葬法も存在するという（尾西 2017）。

¹⁵ 例えば、ヤシガニの多くは海岸樹林付近に生息するが（戸田・岡慎・松崎 2014）、このような開発によって海岸の植生が変容することによってヤシガニのような大型のヤドカリ類が生息不可能となれば、「魂込め」の物語は、少なくとも作

本作の発表された1990年代は、国際的な環境保護の意識が特に高まりを見せる時期であり、例えば1992年6月にはブラジルのリオ・デ・ジャネイロで国連環境開発会議が開かれている。こうした状況のなか、沖縄では1993年4月25日に、即位後初めて天皇夫妻が来沖することとなる。これは、復帰20周年行事として催された「全国植樹祭」という環境保護を啓発するための催しに出席するためであった。さらに「気候変動枠組み条約第三回締約国会議（COP3）」にてヨーロッパや日本が先導し採択された1997年の「京都議定書」を経て、2000年7月には沖縄を開催地とするサミットが開かれ、ここでも環境問題に関する国際的な議論が行われている。一方で、このようなグローバルな環境保全の流れと並行して、「復帰」以来継続する本土主導による沖縄の観光・基地・公共事業（3K）の開発は依然としてとどまるところを知らず、沖縄への入域観光客数は「9・11 テロ事件」や「東日本大震災」の年などを除いて右肩上がりに上昇していくこととなる（沖縄県 2018）。

「魂込め」における「浜」や、そこに存在する「環境的なもの」たちは、いわゆる環境保全的な態度が欲望する記号化された沖縄の「青い海、白い砂浜」のような「風景」、あるいは開発の視線にさらされる観光資源としてのそれではなく、あくまでも沖縄の〈現場〉として語られるものだった¹⁶。本作は、そのような〈現場〉を語ることを通じて、人間が保護・開発する対象として「環境」を扱う態度によって抑圧されてしまうような、人間と人間以外の存在を含めた様々な〈共同性〉を、弱さを抱える身体を取り巻く空間的な広がりとして捉え

直すことを可能にしている。「魂込め」が語るのは、戦争記憶、身体、そして環境が複雑に連関することによって生みだされる〈現場〉というケア空間の物語であった。

結論

目取真俊「魂込め」は、表象不可能な戦争の記憶を、登場人物／読み手がどのように受け取ることができるかという問題を提起する作品であった。しかし従来の試みは、そのような形で提示される作中の記憶を、規範的な言説を攪乱する否定的な要素として読むことが多かった。このため、この作品が語る、身体の弱さとケアの営みを通じた空間的な〈共同性〉の物語を読むことができなかった。

そのため本稿では、この「魂込め」における〈共同性〉の在り方を、同一性原理を前提とした人間像によっては把握できない、〈現場〉の空間的・身体的問題として具体的に示すことを試みてきた。本作の描き出す沖縄戦の記憶の分有の可能性を捉えるためには、従来の研究のように、解釈されることを拒絶する他者の「否定性」を言説的な観点から読むだけでは不十分である。否定性を抱えた身体は、まずもって現実の「弱い身体」なのだ。「魂込め」において戦争記憶は、この身体の弱さとその弱さに差し伸べられるケアの関係を中心にして、人間と人間以外の存在や「環境的なもの」が空間的な広がりの中で連関していくことを通じて想起されている。

こうした試みは、〈現場〉の連関を可視化するというまさにその作用によって、ウタや、そのほかの人物、そして人間以外の存在たちとの連関をより開かれたものにするのではないだ

品に描かれたような形では成立しなかったといえる。

¹⁶ 沖縄をめぐる表象のポリティクスを分析する奥田博子が述べるように「観光産業は、訪問者である観光客と移動先である観光地、観る側と観られる側の政治的および経済的な不均衡を前提とする」（奥田 2012: 184）。観られる側である沖縄は、自然豊かな「癒しの島」といった、本土のまなざしに都合の良い「風景」を与えられ、その「風景」の保護を名目とした本土資本による大規模な観光開発の対象となる。そして、このような「風景」の前景化によって、例えば「基地の島」である沖縄の戦争や占領の歴史、その継続である現在の様々な基地問題が後景化されてしまうと奥田は指摘し、さらにその米軍基地でさえも観光のまなざしを通じて脱政治化され得るという田中康博の指摘がある（田中 2010: 128）。権力を帯びた本土のまなざしの問題を明らかにするこのような分析の重要性を理解しつつ、本稿では新たに〈現場〉という論点を提示することによって、既存の「風景」論によっては議論しえない作品内容の分析を試みた。

ろうか。一連の出来事を経たのちのウタ、あるいはその物語を読み終えた読み手である「わたし」が生きる空間において、常にすでに様々な存在と居合わせているという現実の〈共同性〉を自覚すること——このことによって「ウタ／わたし」が、何によって生かされ、何を守るべきであるかもはじめて理解可能なものとなるように思われるからである。

「わたし」が、すでに人間や人間以外の存在を含む「わたしたち」という共同存在なのであるならば、環境を守ることは、あらかじめ美的に客体化された保全対象としての自然豊かな「風景」を守るという営みを意味しない。また、記憶を守り、受け継ぐという営みは、体験者である「個人」の記憶を、別の「個人」である非体験者に譲り渡すという、あらかじめ個別化

された存在同士のコミュニケーションを意味するのではない。それらは、「環境的なもの」や人間以外の存在と共に〈現場〉に居合わせ、その空間の広がりを生きたことそのものによって成立するものなのである。

目取真俊「魂込め」は、沖縄戦の記憶の分有をめぐる様々な問題や実践を、ケアの〈現場〉という空間的・身体的な視点から改めて問い直す可能性を示している。

【参考文献】

- Ikeda, Kyle, 2012, "Geographically-Proximate Postmemory: Sites of War and the Enabling of Vicarious Narration in Medoruma Shun's Fiction", *International journal of Okinawan studies*, 3(2): 37-60.
- 大澤真幸, 2002, 『共同取材 見たくない思想的現実を見る』岩波書店.
- 沖縄県, 2018, 『観光要覧 沖縄県観光統計集 平成 29 年』.
- 奥田博子, 2012, 『沖縄の記憶 〈支配〉と〈抵抗〉の歴史』慶應義塾大学出版会.
- 尾西康充, 2017, 「「魂込め」論 地域における集権主義と〈嘘物言い〉」『民主文学』620: 125-133.
- 小嶋洋輔, 2009, 「目取真俊「魂込め」 癒されぬ「病」」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』184: 85-95.
- 黒沢祐人, 2019, 「依存とケアの水 目取真俊「水滴」における記憶の現在性の再考」『言語態』言語態研究会, 18: 215-234.
- 新城郁夫, 2010, 『沖縄を聞く』みすず書房.
- , 2018, 『沖縄に連なる 思想と運動が会合するところ』岩波書店.
- 鈴木智之, 2013, 『眼の奥に突き刺さる言葉の銛 目取真俊の〈文学〉と沖縄戦の記憶』晶文社.
- 田仲康博, 2010, 『風景の裂け目 沖縄, 占領の今』せりか書房.
- 大門正克, 2017, 『語る歴史, 聞く歴史 オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店.
- 戸田実・岡慎一郎・松崎章平, 2014, 「海洋博公園内のヤシガニ生息調査」『沖縄生物学会誌』52: 11-19.
- 仲井眞健一, 2016, 「目取真俊「風音（平成九年版）」論 弔い・断絶へ送る」『立教大学日本文学』116: 92-104.
- , 2017, 「目取真俊「魂込め」論 新城郁夫／ウタ, 「祈りは届かなかった」場所に佇むこと」『越境広場』越境広場刊行委員会, 4: 54-65.

- Nancy, Jean-Luc, 1986, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois. (= 2001, 西谷修・安原伸一郎訳, 『無為の共同体』以文社.)
- 西村ユミ, 2007, 『交流する身体 〈ケア〉を捉えなおす』日本放送出版協会.
- 藤田喜久, 2010, 「ヤシガニと沖縄の人々の暮らし」『CANCER』19: 41-51.
- ブーテレイ, スーザン, 2011, 『目取真俊の世界 歴史・記憶・物語』影書房.
- 村上陽子, 2015, 『出来事の残響』インパクト出版会.
- 目取真俊, 2005, 『沖縄「戦後」ゼロ年』NHK 出版.
- , 2013, 『目取真俊短篇小説選集2 赤い椰子の木』影書房.
- 屋嘉比収, 2009, 『沖縄戦, 米軍占領史を学び直す 記憶をいかに継承するか』世織書房.
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press. (= 2019, 伊藤嘉高訳, 『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.)